

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 13日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009年度～2011年度

課題番号：21530330

研究課題名（和文） ソヴェト農業集団化の社会経済的前提

研究課題名（英文） Socio-economic Background of Collectivization of Agriculture In the Soviet Union

研究代表者

奥田 央 (OKUDA HIROSHI)

東京大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号：80092170

研究成果の概要（和文）：ソヴェト農業集団化（1929-1932）において、農民への弾圧や共同体の破壊に見られるように、ソ連共産党は強い反農民的特質をあらわした。その社会経済的前提は、それに先立つ1920年代の歴史的過程に求めることができる。当時、都市と農村の著しい社会経済的懸隔は時代の最大の問題であり、そのなかで、農村のコムニストとコムソモール員は、勤労的な農民の価値を否定し、非農業的な職業を志向する強い傾向をもっていた。

研究成果の概要（英文）： In the course of collectivization of agriculture, the Communist Party of the Soviet Union revealed its own strong anti-peasant characteristics, as was shown in the oppression toward peasantry and destruction of rural communes. The socio-economic preconditions could be found in the historical process of the 1920s, in which one of the most important problems was a significant gap between the city and the countryside. During the NEP period Communists and Komsomol'tsy showed a strong tendency to deny values of industrious peasants and wish for nonagricultural employment.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：農業集団化 コルホーズ 共同体 ソヴェト 共産党 コムソモール ネット

## 1. 研究開始当初の背景

ソヴェト農業集団化（1929～1932年）は、経済的には、共同体にかえてコルホーズという旧ソ連農業の原型をつくりだし、政治社会的には、一党独裁のもとでの農民弾圧のシステ

ムをつくりだした。さらに、現代ロシアが、1990年代初頭に「脱集団化」を目的に大幅な農業改革に着手したことも、農業集団化という歴史的背景に対する理解を要求している。

この時代の出現は、かつての西側や、今はロシアの研究史においても「上からの革命」と

いう視角から考察されてきた。この視角は、スターリン時代というソ連史の大きな転換を見るうえで、さらに現代史全体に対するスターリン主義の意義の大きさを考察する上でも有効な視角であった。しかしそれは、到来したスターリンの時代の担い手を考える上では、不十分な視角である。スターリン時代という強烈な歴史事象には、それに時期的に先立って、時代の深部で発酵しつつある過程が先行している。1920年代農村の「社会主義」の現実の姿を、社会的、経済的、文化史的な総体のなかで問うことによってネップのイメージを変え、スターリン体制の歴史的成立の理解に新しい接近を試みる必要がある。本研究においては、スターリン時代の到来において重要な役割を演じる農村のコムニストと若者の歴史的特質にとくに大きな注目を払う。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、ソ連史のなかで、一定の社会的、経済的自由が保障されていたネップの時期からスターリン時代への転換を、新しい視角から、とくにその担い手に即して構成することである。スターリン時代への移行期とされる1928年初頭から、穀物危機克服の措置、その発展形態としての「クラーク清算」（富農と見なされた農民からの収奪、追放、肉体的抹殺）等々、農村では活動家による農民への弾圧が圧倒的に支配することになるが、「上からの革命」という歴史像は、都市権力による農村への弾圧等々、外部的、外挿的な説明に傾く恐れがある。本研究の課題は、この過程を貫く暴力の歴史的源泉を問うことでもある。あるいは、都市から派遣された活動家の暴力的性向を積極的に受容した農村内部の歴史的前提を問うことである。すでに1920年代において「反ネップ」（«контрнеп»）を潜在的に担う勢力が農村に存在していたことを研究することが、スターリン体制への移行における農村の変革規模の大きさと深さをも説明することを可能にすると思われる。本申請の研究テーマはネップの短期性に着目して、ソ連史の特質に迫ろうとするものである。

## 3. 研究の方法

共産党の機関紙『プラウダ』、共産党青年組織の機関誌『若いコムニスト』、『若いボリ

シェヴィーク』、『農民の若者誌』、『コムソモリスカヤ・プラウダ』等の公刊された定期刊行物を中心として資料を分析した。同時に、モスクワでの滞在を重ねることによって、「国立ロシア社会政治史アルヒーフ」（РГАСПИ）と「ロシア国立図書館」、「国立ロシア歴史図書館」、若者の社会組織に関する文書館（旧 ЦХДМО、現 РГАСПИ 第3読書室）で資料を収集し、その研究に主要な労力を費やした。

## 4. 研究成果

ネップの時代は、政治・社会的には、「労農同盟」のスローガンに見られるように、農民の利害を侵害せず、農民的慣行を尊重すること、経済的には、都市と農村との結合の組み立てを市場経済的に構想し、個人経営的な農村、農民を、国民経済発展の基礎として位置づけたことを、特徴としている。

この場合にまず着目しなければならないのは、1920年代半ばの農村観、農民観が、「下からの」市場関係の担い手としての農民を重視し、「勤勉な農民」を理念的に設定したことである。こうして、体制の最大のマイナス・シンボルとしての「クラーク」（資本家的な意味での富農）と、この「勤勉な農民」を截然と区別し、自分の労働によって富を追求する農民を迫害しないこと、さらに、彼らの市場的な発展を協同組合的な水路のなかに導入して、彼ら個別の経済活動を組織的に援助すると同時に、新しい共同経営の道をさぐる、という政策がはじめられた。

いわゆる「ネップ」は、それに先立って、1921年3月に導入されたものであるが、レーニン自身の社会発展のイメージのなかには、到達すべき未来について、「商品交換」という、現物経済的な単純な観念が根強く存在していた。さらに、ネップ移行直後の1921-22年の農村における大飢饉は、そこからの復興をあまりにも困難にする惨状を農村にもたらした。ネップとはいえ、農村からの穀物の調達には困難を極め、実体的には、戦時共産主義期の徴発政策とはあまり相違がなかった。

しかし、1924年、とくにその年の末にいたって、農民の社会的、政治的活発化のもとで、ソヴェト権力は農民に大きく譲歩し、「新コース」と知られる新しい農民的局面に入った。

「勤勉な農民」の理念が出現したのは、このときのことである。しかし、はやくも1927年秋にはじまった穀物調達危機を原因とする農村からの穀物徴発的な方法は、農民に広汎な暴力を適用し、彼らに飢餓状態を引きおこ

したことは、本申請者がすでに明らかにしたところである。このように見るならば、ネップとして想定すべき具体的なイメージは、従来のような、10年近くつづく特定の政策体系の時代ではなく、脆弱性をもち、短期性によって特徴づけられる時代として浮かび上がってくる。

この「ネップの短期性」は、いくつかの方向からアプローチすることができる。

第一に、ソ連の共産党は、本来、都市の労働者の党としての歴史的な制約を受けており、農民の社会的・政治的活発さの開放という政策目的についても、この制約を超えることはできなかった。

第二に、たしかにネップによる復興の過程で、それが理念とした下からの農民の発展の力が一定の傾向として展開したことを否定することはできない。だが、問題はこの下からの農民的な展開力を政治経済的に体制内部に吸収する構造が存在したかどうかである。その考察のもっとも重要な対象となるのが、1924～25年に実行された「農村に面を向けよ」や「ソヴェト活発化」の政策とその実現過程である。指導部は、このスローガンによって、経済的にも政治的にも活発な、一般の非党員の農民を体制に吸収し、ソヴェトや協同組合に抜擢することによってその基盤を強固にしようとした。

しかしこれは農村の下部の党員の利害と直接に衝突した。農村の党員はふつう農業以外の（まさに統治機構や協同組合などに）有給の職業をもっていた。都市で失業や住宅問題が深刻なもとで、非党員農民のイニシアティブを活発化するという政策は、農村党員や活動家の社会的、経済的状況を脅かし、その反発を招き、十全には機能しなかった。

下部の活動家や農村の共産党員は、農民を重視するネップの理念を支持する一義的な存在ではありえなかった。彼らは農民の出身でありながら、彼らは農業を好まなかった。彼らは故郷に農業をもっている、そこから離れた地域に住み、その居住地においては余所者であり、農民共同体に対して外的な存在であった。彼らは潜在的に、容易に共同体の存在に終止符を打つ勢力たりえた。

1920年代中頃には新しい党員が入党しはじめる。しかし彼らの意識のシンボルもまた、「書類靴」、すなわち農業から離れた職業につくことであり、農村の共産党員は「脱農民化」の担い手であった。1920年代の人口論的分析によれば、過去2度の戦争（第1次世界大戦と内戦）を反映して、農村の人口は著しく若く、20年代末に全面的集団化が開始され

る頃には、農村人口の3分の2が25歳未満であった。20年代中頃から農村でリクルートされる党員の圧倒的な部分がこの「若者」であった。一方、ロシア革命によって復活した農民共同体は、女性や若者を排除した、家長をメンバーとする伝統的な集会を維持していた。

まさにこの伝統からの疎外が、逆に、若者を伝統的な観念から解き放ち、農民を「プチブル」として軽蔑する思想が彼らに浸透することを容易にした。ネップの時代は世代の交代という観点からも興味深いのである。彼らは、その年齢からして精神世界を排他的にロシア革命後の情勢のなかで形成し、粗野な階級闘争の思想をもっとも容易に受け入れた。彼らは反農民的な心性をもち、都市、権力を志向した。その存在は、まもなくやってくるスターリンの農業集団化の特質を象徴していた。それは、社会主義のもとでの「脱農民化」、20世紀ロシアの特殊な「近代化」の開始であった。その意味で、スターリンの農業集団化は、土地と労働の価値を求めたロシアの農民革命の否定であった。それと同時に、集団化、コルホーズ体制のもとで、新しい非農民的な職種の増殖もはじまった。それは、コルホーズの「官僚主義化」の開始でもあった。

スターリン時代そのものを生み出した社会歴史的構造としては、本研究が重視する農村の諸問題以外にも考察すべき問題は多い。しかし本研究では、これまでの申請者の専門領域の制限から、1920年代から30年代にかけての「脱農民化」の過程の考察に課題を絞った。とくにコルホーズ農村の「官僚主義化」の過程については、考察ははまだ端緒に着いたばかりである。また、農民の下からの統治機関として位置づけられていた農村ソヴェトの具体的な問題についても、新たな研究に取り組みつつある。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① 奥田央「ロシア農村の自己課税（1920年代～1930年代初頭）——農民共同体の最終的段階によせて——」『経済学論集』77巻4号、2012年、所収、2～49頁）、査読無
- ② 奥田央『『犁から靴へ』——脱農民化過程

における農村のコムニストとコムソモール員（1920年代から1930年代初頭）——『20世紀ロシアの農村世界』、日本経済評論社、2012年、所収、193～241頁、査読無

(3) 連携研究者 ( )

研究者番号：

- ③ 奥田 央 «От сохи к портфелю»: деревенские коммунисты и комсомольцы в процессе раскрестьянивания (1920-е – начало 1930-х годов) // История сталинизма: итоги и проблемы изучения. М., 2011 (『犁から鞆へ』: 1920年代から1930年代初頭における脱農民化過程での農村共産党員とコムソモール員)、『スターリニズム史: 総括と研究の諸問題』、モスクワ、2011年、所収、495～527頁)、査読無
- ④ 奥田 央 Деревенские коммунисты во главе процесса раскрестьянивания (1920-е – начало 1930-х гг. // Государственная власть и крестьянство в конце XIX – начале XXI века. Сборник научных статей. Коломна, 2009. (「脱農民化過程の先頭に立つ農村コムニスト (1920年代～1930年代初頭)」)、『19世紀末～21世紀初頭における国家権力と農民: 学術論文集』、コロムナ、2009年、235-239頁)、査読無

[学会発表] (計1件)

- ① 奥田 央 Деревенский коммунист как монополист должности: 1920-е - начало 1930-х годов 招待講演「有給ポストの独占者としての農村コムニスト: 1920年代～1930年代初頭」モスクワ大学歴史学部経済史センターおよびロスペン（出版社「ロシア政治百科事典」）協賛、国際学術会議『スターリニズム史——社会的意味づけの総括と展望』（2008年12月5～7日、於モスクワ）。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

奥田 央 (OKUDA HIROSHI)  
東京大学・大学院経済学研究科・教授  
研究者番号：80092170

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：